

| | |
|--------------|---|
| Title | 動詞オクの意味の抽象化過程 |
| Author(s) | 由井, 紀久子 |
| Citation | 阪大日本語研究. 7 P. 95-P. 105 |
| Issue Date | 1995-03 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/8456 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

動詞オクにおける意味の抽象化過程

The Process of Semantic Bleaching of a Verb *Oku*

由井 紀久子

YUI Kikuko

キーワード：オク，～テオク，補助動詞，意味の抽象化，類像性

0. はじめに

日本語学習者が補助動詞用法を学習する時、対応する本動詞の意味との関係に興味を示すことがある。語彙の意味を担った動詞が文法化され、本来の意味を失い文法的意味に転移することは多くの言語で見られる現象である (Hopper and Traugott 1993)。言語が話者の世界認識のしかたを規定するとすれば、一形式が表す意味を統合的に分析することにより、当該言語における意味の抽象化過程の傾向・特徴の側面を見ることができるようになり、世界認識のしかたも見えてくると考えられる。本稿の目的は日本語において文法化された用法を持つ形式が表す意味はどのような内部構造を持っているのか、また、その形式を通して行う世界認識にはどのような傾向が認められるのかという点に注目し、意味を分析することである。具体例として補助動詞用法を持つ動詞オクを取り上げ、オクが内蔵する意味構造を明らかにしてゆきたい。オクは本動詞として具象空間内での事物の位置関係が中心的意味に据えられるだけでなく、補助動詞にあってはもくろみ性やアスペクトの意味 (高橋1973、吉川1973など)を表す抽象化した意味を持つ動詞であり、また、基本的な動詞として使用頻度の高い動詞であることなどが分析に取り上げる理由である。基本的な語はそれぞれの言語において本来の意味からは離れた用法や慣用表現を持つことが多いが、補助動詞用法を持つ動詞オクもこの例に洩れない。本研究によって明らかになった内部構造を通じて、日本語学習者がオクのような基本動詞によって切り取り

認識される世界を把握しやすくすることも二次的に望むことである。

以下、本稿では、まず本動詞用法の意味を確認し、次に複合動詞用法と補助動詞用法の意味を検討し、さらに、本動詞、複合動詞と補助動詞のすべての用法にある意味を統合的に分析することによって、動詞オクの持つ意味の広がり
の内部構造を明らかにしたい。

なお、～テオク／～デオクには縮約形～トク／～ドクがあるが、本稿では～テオク／～デオクの形式を取り上げ、縮約形は直接には扱わない。また、文法化の過程、すなわち、抽象的な意味への変化の過程は通時的な意味変化と切っても切れない関係にあるが、本稿は共時的に見た意味の広がりに着目しつつ、世界認識の方向性の解明を目指すものであり、通時的な意味変化について扱うものではないことを予め断っておきたい。

1. 本動詞オクの意味

本動詞としてのオクにはどのような用法があるか、以下、基本的と考えられる用法から見てみよう。

- (1) 本を机の上に置く
- (2) 離れ部屋に下宿人を置く
- (3) 神戸市に対策本部を置く
- (4) 社長は山田部長に絶大の信用を置いている
- (5) あの人とは距離をおいて付き合いおう
- (6) 少し時間をおいてから再度チェックしてみる
- (7) 赤ん坊を家に置いて買物に出る
- (8) 練ったパンの生地を一時間おく

(1)～(4)は対象の具体か抽象の差はあるが、「対象の移動」すなわち空のところにある事物を持ってくることを表す用法である。(5)～(6)では、時間あるいは数や長さを隔てることを表す用法である。(7)～(8)は対象を移動させるのではなく、「そのままの状態を保つ」ことを表している。

(1)～(8)のなかで最も具体的な移動の意味を表す(1)を抽象化を考える上で最も中心的な意味と考えたい。〈移動〉は〈起点＝動作主の手〉から〈着点＝机

の上>へ行なわれている。同じく物を移動させる動詞である移スとの違いは<起点>である。移スでは動作主の手は経由点であり、起点ではない。

- (9)a. 花瓶をテレビの上から床の間に移す。
b. ?花瓶をテレビの上から床の間に置く。

また、設置する動詞である据エルや据エ付ケルなどとの違いは<着点>で、固定させるかどうかで違いが出てくる。オクの場合、<着点>に到達するまでが意味の対象となっている。

- (10)a. アンテナを屋根に据える。
b. ?アンテナを屋根に置く。

また、オクは移動させるという<働きかけ>を持つ意志動詞である。これらのことから分かる(1)のオクが有する意味成分は次のように設定されうる。

- (11) <移動物=具象の対象>
<移動経路=空間>
<起点=動作主>
<着点=目標位置>
<働きかけ=移動>

なお、(2)~(8)の意味成分については、後ほど第4節の統合的分析で扱う。

また、上にあげた基本的な意味から派生したと考えられる慣用的用法もある。

- (12) ルイ・ヴィトンのバッグを質に置く
(13) 算盤を置く
(14) 筆を置く

これらはもともと(1)~(4)の類いの用法がイディオム化し、それぞれ「預ける」「計算する」「やめる」の意味が発生したものであろう。

2. 複合動詞用法オクの意味

次に、オクが動詞の連用形に添えて用いられる複合動詞用法の意味を見てみたい。

- (15) 先方の話を聞き置いた

- (16) 路上の喧嘩を見置いて立ち去った
- (17) 一言言い置いて立ち去った
- (18) 一言だけ申し置きたく存じます
- (19) ここ5年間配当金は据え置かれたままだ
- (20) 駅前に捨て置かれた自転車がたくさんある
- (21) 郵便局に小包が留め置かれている
- (22) この商品、取り置いてくださいますか
- (23) 以後、お見知り置きください

これらは「～をし、そのまま何もしないで同じ状態を保つ」ことを意味している。本動詞用法の(7)(8)と同様に、「そのままの状態を保つ」を表しており、対象が事物から動作に変わったとはいえ、本動詞の意味が引き継がれたことを示している。次に補助動詞用法～テオクを見てみよう。

3. 補助動詞オクの意味

補助動詞用法は従来、文法的なふるまいを中心に研究されてきた。しかし、Ono(1992)でも述べられているとおり、一見補助動詞の形式でありながら本動詞の語彙の意味を残す用法もある。まず、その例から見てみよう。

- (24) 椅子を作っておいた (Ono1992)
- (25) 冬物を屋根裏部屋に上げておいた

これらは「作って」「置いた」および「上げて」「置いた」の2つの連続する出来事を共通の場所格で表している場合と、何かの準備のために「作った」あるいは「上げた」場合の2つの解釈が可能である。前者の場合は、Ono(1992)も述べているとおり、2つの動詞の間に音声的な間が入ることによって区別されると思われる⁽¹⁾。この用法に残されている語彙の意味とはいうまでもなく、本動詞用法の(1)の用法を引き継ぐものである。

次に完全に文法化している補助動詞用法の意味を見てみよう。

- (26) 明日パーティをするので、ビールを20本買っておいた
- (27) いくら言っても言うことを聞かないものだから、昼休みもずっと立たせ

ておいた

- (28) 検査前日の7時までに晩御飯を食べておいてください
- (29) もちろん星名とて今更ら逃げかくれするような男ではありませんが、かわりに念のため今度は私のパスポートをさしあげて置きましょうか
(「地中海」)
- (30) 「暢気眼鏡」と云う題で短篇書くことを思いつき、直ぐ取りかかったが、半分程で筆が進まなくなった。暫く放って置き、またかかって見ると、その時は更に気乗りしなくなっていた。テーマがぐらつき出したからだ。
(「暢気眼鏡」)
- (31) あんたは、これ程までに人間として恥しいことをして置きながら、なおまだこの学校にいるつもり？
(「あさくさの子供」)

これらの用法は従来、文法的見地から研究されてくることが多かった。鈴木(1972)は～シテオクをもくろみ動詞として捉え、「あとのことを考えにいわせて、動作をおこなうことをあらわす」としている。上の(26)(29)がそれに当たる。また、笠松(1999)は鈴木的主張を引き継ぎ、「アスペクト的な意味特徴はもくろみ性からみついでいて、きりはなすことができないだろう」と述べている。一方、高橋(1976)は「しておく」はアスペクト体系に属する形式として扱い、「対象を変化させて、その結果の状態を持続させる動詞」とまず規定している。ただ、もくろみ性、「つぎにおこることがらのために準備的な動作としておこなう動作をあらわす」用法とは分けて規定し、基本的な意味としてこの2つを立てている。高橋のアスペクト研究は吉川(1976)に受け継がれ、「～ておく」の基本的意味を「対象を変化させて、その状態を持続させること」としている。吉川はさらに詳しく「しておく」を次の7つの意味に分けて考察している。

- (32) ① 対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させることをあらわす
② 対象を変化させ、その結果の状態を持続させることをあらわす
③ ある時までに対象に変化を与えることをあらわす
④ 放任をあらわす

- ⑤ 準備のためにする動作をあらわす
- ⑥ 一時的処置をあらわす
- ⑦ いくつかの特例

吉川(1976)の研究は前項動詞の種類までも詳しく含んだ論考である。しかしながら、これらの研究はあくまでもアスペクトやもくろみ性といった文法的意味を取り上げたものであり、前項動詞に及ぼされた意味を研究対象としたものといえる。本稿で扱うのは(テ)オクのみから厳密に取り出したの意味でなければならない。例えば、(32)①の「対象の位置を変化させ」というのは、「立てふだを立てておきました」において「立てふだを立てた」部分が表す意味であり、本稿で扱うオクが表す意味は「その結果の状態を保つこと」になろう。また、④の「放任をあらわす」の「放任」は放任の意味をあらわす動詞からつくられるのであり、(30)を例にとると、「放って置き」の「放って」がこの意味を担うのである。そして(テ)オクは「保持」をあらわすことになろう。この観点から(26)~(31)にあげた(テ)オクの基本的意味をそれを付けない形と比較しながら、もう一度考えてみたい。

(26) 明日パーティをするので、ビールを20本買っておいだ。

(26') 明日パーティをするので、ビールを20本買った。

(29) もちろん星名とて今更ら逃げかかれするような男ではありませんが、かわりに念のため今度は私のパスポートをさしあげて置きましょうか。

(「地中海」)

(29') もちろん星名とて今更ら逃げかかれするような男ではありませんが、かわりに念のため今度は私のパスポートをさしあげましょうか。

(26)(29)の(テ)オクが表す意味は「あることのために備える」になろう。

(27) いくら言っても言うことを聞かないものだから、昼休みもずっと立たせておいだ。

(27') いくら言っても言うことを聞かないものだから、昼休みもずっと立たせた。

(27)では「放任」のところでも述べたように「保持」を表していることになろう。

う。

(28) 検査前日の7時までに晩御飯を食べておいてください。

(28') 検査前日の7時までに晩御飯を食べてください。

これは(32)の③「ある時までに対象に変化を与えることを表す」に当たるが、(テ)オクに限ると「～を終わらせる」になろう。

(30) 「暢気眼鏡」と云う題で短篇書くことを思いつき、直ぐ取りかかったが、半分程で筆が進まなくなった。暫く放って置き、またかかってみると、その時は更に気乗りしなくなっていた。テーマがぐらつき出したからだ。

(30') 「暢気眼鏡」と云う題で短篇書くことを思いつき、直ぐ取りかかったが、半分程で筆が進まなくなった。暫く放り、またかかってみると、その時は更に気乗りしなくなっていた。テーマがぐらつき出したからだ。

これは上の④で述べたように「保持」を表しているだろう。

(31) あんたは、これ程までに人間として恥しいことをして置きながら、なおまだこの学校にいるつもり？

(31') あんたは、これ程までに人間として恥しいことをして置いて、なおまだこの学校にいるつもり？

(31'') あんたは、これ程までに人間として恥しいことをしながら、なおまだこの学校にいるつもり？

(31)はいわゆる逆接を表す形式だが、(テ)オクについては結果の状態の「保持」を表しているものと考えられる。

以上、補助動詞用法の意味をまとめると次の3つになる。

- (33) ① 保持させる
 ② あることのために備える
 ③ ～を終わらせる

次節ではこれまでに見てきた意味を統合的に分析することを試みたい。

4. 統合的意味分析

本稿の目的は本動詞用法から補助動詞用法までの意味を統合的に分析し、オクの持つ意味構造を明らかにすることであった。このような観点から、すなわち、オクを本動詞と補助動詞との関連づけで言及している研究にOno(1992)がある。Onoはシマウと対比させながら、テオクは「完了」「準備/目的」「意志的」の3つの文法的用法を合わせもつマーカ―だとしている。完了についてはオクは結果の状態の持続、シマウは出来事の最終面を強調していると違いが文法的な意味にも反映しているとする。準備的な用法は本動詞の(1)の用法から広がったと述べている。その根拠は「もしある人が何かをどこかに置き、そのことをだれかに言うのなら当然なんらかの理由があってそれをしたから」としている。また、意志性に関してはオクの準備/目的的な意味が必然的に意志的行為を表すとしている。Onoの意見に基本的に異論はないのだが、本稿の目的である意味構造を探るという観点からは、なぜかということまで十分説明されていないし、基本的な2つの意味の関係についても説明がないという点で不十分である。では、1節で見た「空間的事物の移動」と「そのままの状態を保つ」は意味論的にどのように結びつけて考えられるだろうか。

ここで1節で見た本動詞オクの中心的意味成分をもう一度見ることから始めよう。

- (11) <移動物=具象的对象>
 <移動経路=空間>
 <起点=動作主>
 <着点=目標位置>
 <働きかけ=移動>

この構造がそれぞれの意味とどう関わっているのかを以下見てみよう。本動詞にはこの対象の移動が抽象的になる場合があった((3)(4)の例参照)。これは<移動物=抽象的对象>とすることで抽象化を表すことができる。また、時間や距離などを隔てる場合((5)(6)の例参照)もやはり抽象的对象が移動物になると考えられる。

次に「そのままの状態を保つ」について考えてみる。これは、<移動経路>を<空間>から過去から未来へ流れる<時間軸>へと抽象化させ、<移動物>を<状態>とすることで説明がつく。つまり、(7)であれば「赤ん坊が家にいる」

状態を時間軸に沿わせて移動することになり、(8)であれば「練ったパン生地」をそのままの状態で時間軸に沿わせて移動することになる。いつまでかという最終時点が指示されなければ、以下のように表される。

(34) 保持させる

- <移動物=状態>
- <移動経路=時間軸>
- <起点=発話時>
- <着点= ϕ >
- <働きかけ=移動>

複合動詞における状態保持と補助動詞の持続も同様で、別の行為を加えず、前項動詞の行為を行った<状態>を<時間軸>に沿わせて、<移動>することで説明がつく。

補助動詞における「あることに備える」はどうであろうか。(26)の「ビールを買っておく」であれば、<移動経路>はやはり、<時間軸>であるのだが、<着点>が<目標状態>に抽象化されていることになろう。<目標状態>とは(26)でいうと「パーティのあるべき状態」とでもいうべき状態のことである。この、<目標状態>に向かって「ビールを買う」ことによって「ビールが存在する」という<行為の結果>が<移動>していると説明できる。

(35) あることに備える

- <移動物=行為の結果>
- <移動経路=時間軸>
- <起点=発話時>
- <着点=目標状態>
- <働きかけ=移動>

最後に「行為を終わらせる」について考えると、<着点>を<目標時間>に変えると説明がつく。(28)の「食べておく」であれば、「検査前日の7時」という<目標時間>に向かって適当な<起点>時間から<動作>が<時間軸>に沿って進み、<着点>の<目標時間>に<動作>が終了しているように<働きかける>ことで説明されよう。。

(36) ~を終わらせる

- <移動物=動作>

- <移動経路=時間軸>
- <起点 = ϕ >
- <着点 = 目標時間>
- <働きかけ=移動>

5. おわりに

以上、意味成分の写像関係をもとにオクの意味構造を明らかにした。従来2つの独立した意味として捉えられていた「空間移動」と「そのままの状態保持」を空間から時間への認識の抽象的拡張を考えることで意味の統合がなされた。

本稿は教育現場からの疑問を出発点としている。この意味では、意味の抽象化過程をエティックな研究方法としてのトピックとなり、類型的な研究への発展が可能である。また、意味の抽象化過程の解明は記号論的興味への展開可能性をも含んでいると考えられる。類像性の研究は現実世界と言語形式の間でいくつかの研究がなされているが、具象空間認識から抽象概念認識への類像性といった人間の認知の傾向性の解明への発展をも期待したい。

今後は意味成分の写像の関係を補助動詞全般にわたって考え、写像関係により認知の方向性を広く見てゆきたい。また、本稿で十分に述べきれなかった前項動詞、文脈との関係についても追究してゆきたい。

注

- (1) Onoto Haiman(1983)の類像性についての考え方を用い、*iconically motivated*とし、音声的な距離が概念的な距離にreflectすると記している。

資料

例文に特に出典のないものは作例及び改定した例である。その他は阪大日本学研究室のコーパスを使わせていただいた。

参考辞書

- 『現代国語例解辞典』小学館
- 『広辞苑第4版』岩波書店
- 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 『新装改訂新潮国語辞典』
- 『使い方の分かる類語例解辞典』小学館

参考文献

- Brugman, C. M. (1988) *The Syntax and Semantics of 'Have' and its Complements*.
UMI Dissertation Services.
- Fillmore, Ch. J. (1971) *Santa Cruz Lectures on Deixis* IU Linguistics Club.
- Hopper, P. J. and Traugott, E. C. (1993) *Grammaticalization* Cambridge UP.
- 笠松郁子(1993)「「しておく」を述語にする文」言語学研究会編「ことばの科学」6
むぎ書房
- 国広哲弥(1982)「意味論の方法」大修館
- 宮島達夫(1972)「動詞の意味・用法の記述的研究」秀英出版
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things* Chicago UP.
- 森田良行(1977)「基礎日本語」1 角川書店
- McMahon, A. M. S. (1994) *Understanding Language Change* Cambridge UP.
- Norvig, P. and G. Lakoff (1987) "Taking: A Study in Lexical Network Theory".
BLS 13.
- 大堀俊夫(1991)「文法構造の類像性」『記号学研究』11
- Ono, T. (1992) "The grammaticization of the Japanese verbs *oku* and
shimau." *Cognitive Linguistics* Vol. 3-4.
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎(1976(1969初出))「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 吉川武時(1976)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 由井紀久子(1993)「モラウの意味的抽象化・希薄化の過程」『阪大日本語研究』5

(ゆい きくこ 文学部講師)